

# 農民美術「こっば人形」の 児童文化財化について

—子どもの人間形成に寄与する人形の制作—

有馬 知江美<sup>1</sup>

## 1. はじめに

子どもの人間形成において、自分を取り巻く世界に対する彼らの自由な言葉とまなごしを醸成するために、彼らの遊戯を保障することの重要性をこれまでの一連の研究で考察してきた。そのうち、すでに拙稿「子どもの『自由』を保障する児童文化財の制作について —児童文化財と子どもの権利の交差性—」<sup>1)</sup>では、児童文化財を通じた遊戯に焦点をあてた論考をなしている。本研究では、子どもの生活に浸透している児童文化財のうち、彼らが直接的かつ継続的に触れ、その制作理念を身体化しやすい玩具の影響力を看過することができないとの観点から、子どもの人間形成に寄与する玩具の制作をめぐる考察をなすこととする。なお、多様な玩具のうち、人間が志向すべき自由を疑似的に表現し、そこに潜在する自由を、遊戯を通して子ども達が身体化しうる可能性を多分に包含しているものとして、本研究では人形を捉えている。また、本研究の理念の具現化にあたり、人形の素材として木材の選択が不可避的であるという判断から、木彫人形の制作に意義を認めている。その際に、長野県伝統工芸品農民美術「木片（こっば）人形」の根底にある人形哲学と作品形態が適しているとの判断から、その手法に依拠した人形制作を探究することとする。

---

<sup>1</sup>白鷗大学教育学部  
e-mail : arima@fc.hakuoh.ac.jp

## 2. 子どもの人間形成に寄与する人形

本研究において探究する人形は、主に幼児期の子どもの遊びを想定して作られる。幼児期に身体化された諸感覚は、爾後、生涯にわたり潜在することが考えられる<sup>2)</sup>ように、子どもが世界に対して自由であろうとする感覚もまた、幼児期のうちに身体化しておきたいのである。

なお、それは、保育者によって設定される計画的な保育活動のみならず、むしろ、子どもの生活に浸透する玩具の使用を通して潜在的にかつ長期的になされると本研究では捉えている。したがって、保育室や家庭、子どもの遊び場等において子どもが常に自由に手に取ることのできる玩具としてこの人形を設置したいのである。

ここでまず、子どもの人間形成に寄与する児童文化財として、本研究が人形を適切なものと捉える理由に言及しておきたい。人形は、コミュニケーションや社会創造の疑似的体験を子ども達にもたらし、また、「ひとがた」の中に自己投影をしたり、他者性を捉えたりすることで、自己認識及び他者認識や、自他の生の尊重を子ども達に促しやすいという利点を持つ。また、「ひとがた」として人間を想起させやすい人形から得られるいのちの感覚は、現実的で直接的な人間との関係性の中では時には得られにくい安らいだ感情(Geborgenheit)を子どもにもたらすのである。ボルノー (Otto Friedrich Bollnow: 1903-1991) によれば、安らぎとは極めて非合理的な概念ではあるものの、子どもがそこに精神的な拠り所を得られるものであり、また、そうした拠り所があることが彼らの自己表出を可能にするのである<sup>3)</sup>。他者との関係性を不可避的なものとする保育現場では、現実的な対人関係に代替するものとして、人形の存在価値は取り分け大きいということがいえるであろう。

これに対して、今日の保育現場では人形の導入はそれほど積極的ではない。かつて、昭和23年に発行された「保育要領」では、人形の語は見られるものの、現行の「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」等には、子どもに与える児童文化財として

具体的に人形の語は見られない。その背景には、子ども用に制作された人形の素材の多くが布製であることから、ダニやウイルスの付着等の衛生管理上の問題があることが推測される。また一方では、人形に潜在するある種の人格性が、個々の子どもと人形との双方向的な関係性に終始し、集団保育になじまないという判断もあると思われる。

さらに、木彫人形の導入は僅少であるといつてよい。我が国において玩具としての木彫人形は、元来、親近性のないものともいえることから扱ひ方や耐久性への不安を生起させやすく、また、保育的価値が未知である割には高価格であるということを所以としていると思われる。

本研究では、保育現場に導入されにくい木彫人形の位置づけを認識しつつ、以下のように、その意義の考察をなした上で、子どもの人間形成に寄与する木彫人形を具現化するものとする。

### 3. 児童文化財としての「こっば人形」の意義

#### (1) 木彫人形の意義

子ども用に制作される人形玩具の多くは、布、塩化ビニール等、柔軟性に富む素材が選択されやすい。人形遊びにおいて、遊戯者の心情が反映されやすいという点において、子どもと人形との柔軟な関係性を保障する素材として選択されていると思われる。それ故に、木製玩具の堅固性は、人形に期待される使用方法に照らした場合、一般的には、適切性を欠いた性質と認識されることは避けられない。しかしながら、本研究で探究する人形の素材は木材であることを必然的なものとするのである。

すなわち、木材を素材とした木彫人形は、布製の人形とは異なり、柔軟性に乏しいことを所以として、遊戯者の意志や心情を直接的に反映しない。こうした遊戯者の意のままにならないという他者性を持つ木彫人形は、むしろ、他者によって翻弄されない確固とした人間の生を示すことにつながり、個々の子どもが爾後に育んでいくべき自由な人間の範となりうると考えるのである。

もつとも、遊戯者の意のままにならないという毅然とした他者性は、木材以外の他の素材でも表現しうることを付言しておきたい。たとえば、金属、陶器、ガラス等々の素材もまた、柔軟性に乏しいという点では木材の性質を超えている場合も多い。こうした諸素材がある中で、人間形成に寄与する人形の素材として木材を不可避的なものと捉える理由は、本研究が子どもと人形の関係性を次のように捉えていることを所以としている。

ここでまず、人形に内在させる毅然とした他者性とは、他者を寄せ付けない孤立性と同義ではないということを確認しておかなければならない。つまり、本研究で問う児童文化財としての人形とは、毅然とした<sup>・</sup>孤<sup>・</sup>独<sup>・</sup>性<sup>・</sup>を志向することが不可欠でありながら、一方で、遊戯者の人形への関わりを否定する、<sup>・</sup>孤<sup>・</sup>立<sup>・</sup>性<sup>・</sup>を志向するものではないということなのである。換言すれば、人形は、遊戯者である子どもとの関係性を肯定的に捉え、子どもを受容しうる性質を持たなければならないのであるが、木材はこうした両義性を併せ持っているという点において、最適の素材なのである。

一般的に木材はぬくもりを人に与える素材として知られ、金属や花崗岩、塩化ビニール等の各種材料と比較して、素材特有の接触感を伴っている<sup>4)</sup>。こうした接触感として挙げられる感覚とは、「温冷感」、「粗滑感」、「硬軟感」、「乾湿感」であるが、特に木材の持つ「温冷感」に由来するぬくもりが、児童文化財としての人形の素材としての適切性を示している。すなわち、熱伝導率の低い木材は、触れても冷たさを感じにくくする性質を持っており、それがぬくもりという言葉として表現されるのであり、子どもの体温に近い接触感を彼らにもたらすことで、子どもと人形との対話的關係性を促すような同質性を生み出すのである。

こうした同質性が、毅然としつつも、一方では他者を受容しうる両義的価値を持った人形の制作に欠かせない性質として評価されるのである。なお、これに関連して、近年、木材に特有の接触感が人体への生理的なストレスの抑制をもたらすという研究も明らかになりつつあり<sup>5)</sup>、児童文化財としての木彫人形の意義は今後さらに解明できると思われる。

ところで、児童文化財としての人形制作にあたり、素材として木材であることの有意性は、樹木に宿るいのちの両義性にも関連していることに留意したい。樹木は、「幼齢期から一生を通じて作られてきた木部細胞がそのまま蓄積されているため、一本の樹幹内でも中心から外方に向けて木部細胞の諸性質に個体発生的な変動がある」<sup>6)</sup>という性質を持ち、心材や辺材、形成層、樹皮等により構成されているが、「心材部はかつて辺材部であった部分が生活機能を失って機械的支持機能だけを果している」<sup>7)</sup>ということから、樹木における心材部の性質は死とほぼ同義であると捉えることができる。一方、心材部を取り巻く辺材は、生が充溢した性質を示すものである。こうして樹木は、死を内包しながら大地に根を張りいのちを継続させていくものである<sup>8)</sup>が、ここに認められるいのちの両義性は人形の本質に近似しているのである。

すなわち、生を受けたその瞬間から一方では死へと向かうことを免れない人間は、すでに生に死を内在させているといっても過言ではない。そうした人間の様態を疑似的に体现化しているものが人形であるということができるとすれば、人形制作において人間の様態との近似性を内包しているという観点から、木材は最も適した素材であるといえるのである。

以上の他にも、人形制作上の木材の適切性をさらに次のように示すことができる。

本研究では、玩具としての人形を子ども達に単体で提供するのではなく、後述のように、それぞれの相違が明らかである計5体の人形を一組にして保育室等に設置するのである。こうした人形間の相違を出しやすい素材として木材の有意性を指摘することができる。

具体的には、人形の個体間の相違は、彫刻によって表現される。そこで、彫刻のしやすさという観点から、シナ、朴、桂、白樺等の木材が選定されるが、使用する木材の種類相違は、複数の人形制作にあたり、人形の色、香り、感触の相違をもたらす他、玩具としての使用において時に響く音の相違となっても現れる。また、彫刻の過程において、形、大きさ、

微細な表現等の個体差も出しやすく、他方では経年使用により必要となる修復のしやすさという点でも優れている。

もっとも、彫刻に要する時間や人件費は人形のコストパフォーマンスを低める可能性があることは否めない。また、木彫技術の習得に要する時間に鑑みると、人形制作を保育者や保護者が試みる場合に完成に至るまでの長期化が避けられず、計画が頓挫することも予想される。さらに、子どもの使用という観点から、耐久性に関する懸念が皆無というわけではない。人形の使用状況を管理する必要があるため、保育者の負担が増大する等の問題が残されていることを付言しておかなければならない。

## (2) 「木片人形（こっば人形）」の歴史的意義

本研究では木彫人形の制作にあたり、木端を素材として人形を制作する、長野県伝統工芸品農民美術「木片（こっば）人形」に範を得るものとする。ここで論を進める前にこの人形の表記について確認しておきたい。

農民美術の黎明期以降、「木片人形」の表記が一般的であったが、これに対して、現在の普及運動では、「木片人形」の表記と差別化することを目的とし、「木端人形」や「こっば人形」等の表記上の使い分けがなされつつある。なお、平成29年2月に「こっば人形の会」が長野県上田市で設立されたのを機に、「木片人形」と「木端人形」の表記に込められた諸思想を統合化する形で、「こっば人形」の表記の使用がなされている。本稿においては、言及する人形の時代的背景の相違に基づきながら、「木片人形」と「こっば人形」の語を使い分けていくこととし、また、時代の両義性を示す際には「木片人形（こっば人形）」とする<sup>10)</sup>。



画像1 「木片人形」  
子守人形<sup>9)</sup>作者不詳  
(上田市立美術館蔵)

「木片人形」は大正8年に芸術家山本鼎（明治15年—昭和21年）により提唱された農民美術運動において作られた人形であり、山本によって命

名された<sup>11)</sup>ものである。農民美術運動は、長野県小県郡神川村にて、農民に美術的趣味をもたらし、また、農閑期の生業を得ることによる農村経済の向上を目的として興った運動であり、木彫製品<sup>12)</sup>や刺繍製品<sup>13)</sup>等の多様な農民美術品が作られた。それらは大正期以降の観光ブームに乗る形で当時の人々の登山<sup>14)</sup>、スキー、湯治等の際の土産物として販売される他、三越呉服店等、都会の百貨店で開催される展示即売会等で野趣あふれる製品として都会人に人気を博していたという。

こうした農民美術運動において、農民青年達によってまず初めに作られたものが「木片人形」であった。その後、全国百余箇所で開催された農民美術講習会を経て、農民美術運動は全国的に拡大したものの、戦況の悪化等によりやがて衰退して戦後に至ったが、一部の農民美術作家によって上田を中心に継承され今日に至っている。なお、近年、上田市立美術館を中心に一般市民を対象とした「こっば人形初心者講習会」が開催され人形制作への関心が高まっている。

当初、大正時代に山本の呼びかけによって集まった農民青年達は、農民美術品の製作方法を学ぶために農民美術練習所（大正11年1月に「日本農民美術研究所」に改称。）に集い、その裏手にあった「どろやなぎ」の木を伐りだして、人形を彫ったと言われている。どろやなぎのみならず、朴、桂等の木端の使用<sup>15)</sup>は、人形の大きさのある程度こじんまりとしたものに制限することとなり、「一寸から一寸二分位」<sup>16)</sup>の子どもの手で握れるほどの大きさを基本としている。

また、山本は、「木片人形」を「全體が胡粉で塗られ、其上に彩つて」あると説明し、さらに、「大まかに面が作つてあつて、半分は筆で活かしてある漫画のやうな人形」と述べている。人体を面で彫るという、キュビズム的な洗練された面で構成される「木片人形（こっば人形）」の特性は、本格的な芸術教育とは無縁であった大正期の農民による製作を可能とした製作法であり、その技法の習得のしやすさという利点を持つのである。

なお、「木片人形（こっば人形）」の製作法の特徴としては、製作者が彫

刻や彩色に至るまで全工程を一人で担うという点が挙げられ、一体の人形が完成を迎えるまでの独特の緊張感と同一人物によって施される彫刻と彩色の調和は、人形の魅力をひきだす要因となっている。

ところで、近年、全国各地において、従来からの伝統工芸品に新世代の発想を加えて変容させるという潮流が見られるが、本研究における「こっぱ人形」の児童文化財化はそうした流れに掉さすものではない。むしろ、「木片人形（こっぱ人形）」の人形哲学が、その児童文化財化を促す潜在性を携えているという観点からそれを具現化しようとするものである。そこで次節では、「こっぱ人形」の児童文化財化の必然性について考察するものとする。

### **（3）芸術的価値に根差した「木片人形（こっぱ人形）」の児童文化財化の意義**

農民美術運動の拡大に伴い、各地で「木片人形」の製作がなされるようになった大正時代から昭和初期にかけて、そこには多くの芸術家が介在した。農民美術運動提唱者の山本鼎に賛同して日本農民美術研究所に参与した芸術家には、画家の倉田白羊（明治14年－昭和13年）の他、彫刻家である、吉田白嶺（明治4年－昭和17年）、石井鶴三（明治20年－昭和48年）、村山桂次（明治32年－昭和6年）、木村五郎（明治32年－昭和10年）ら多数が存在した。彼らはいずれも自ら絵画作品や彫刻作品を制作する芸術家であったが、そうした専門性に立脚しながら、「木片人形」の意匠及びサンプルの作成や、農民美術講習会での指導にも従事していた。すなわち、人形製作を学ぶ過程で農民青年達はサンプルを模刻したのであるが、その際に範とした「木片人形」のサンプルには高い芸術的価値が内在していたのである。彼らはこうした「木片人形」を間近で捉えながら、それを模刻して自ら「木片人形」を彫ったのであり、その過程において、芸術的価値が身体化されていったと解釈することができるのである。換言すれば、農閑期の生業を得るための単なる量産を目的とした技術伝達ではな



く、むしろ、農民青年達に美術的趣味をも涵養したいという教育観が人形製作指導の根底に見られることに留意したいのである。

ところで、大正期以降今日に至るまで制作されている「木片人形（こっば人形）」の作品の多くには、台座がついている。この台座は、「木片人形（こっば人形）」を彫刻作品のカテゴリーとして位置づける一因になっている。一方で、山本は「木片人形」を「大人の書斎玩具」<sup>17)</sup>と述べてもおり、芸術性を保持しつつも、「木片人形」の玩具的側面を認めていたという点を窺い知ることもできる。それは、既述のように、彼が「木片人形」を「漫画のやうな人形」と述べていることにも現れており、美術的な彫刻作品とは一線を画しているものとの印象を私たちに与えている。もっとも、山本による「玩具」の語は、必ずしも子どもが用いる現代的な玩具と同義ではなかったという可能性も高い。ようやく児童文化という概念が生じ始めた大正10年頃とほぼ同時期に山本が述べた玩具の語は、子どもに特化した玩具であったとは断言できないのである。

以上の点から、「木片人形（こっば人形）」は従来、その使用者をあいまいにしてきたという指摘をしてよいと思われる。すなわち、「書斎玩具」の語は、書斎の使用者である大人と、玩具の語から連想される子どもという、「木片人形」の使用者をめぐる二重性を引き起こしているのである。100年にもわたる農民美術運動の歴史において、この「木片人形（こっば人形）」の使用者についての論議はあまり見られなかったように思われる。

本研究ではこうした「木片人形（こっば人形）」に付随している玩具性をめぐるあいまいさを認識しつつ、「こっば人形」が彫刻作品という芸術的価値をも潜在させている側面を重視しながら、子ども用の玩具として子ども達に提供する必然性を捉えているのである。

すなわち、芸術家の介在によって意匠及びサンプル制作がなされてきた「木片人形（こっば人形）」に内在する芸術性は、子どもの審美性を高めるという点において、彼らの人間形成に寄与することが明らかである。換言すれば、可能な限り洗練されたキュビスム的な面によって人間の生を表現

する「こっば人形」を通して、子ども達は洗練された人間の生を視覚的及び触覚的に身体化し、やがて精神の洗練性をも感得することができると思われる。



画像2 現代の「こっば人形」徳武忠造作  
(個人蔵)

また、「木片人形（こっば人形）」の題材に関してもそこに子どもの人間形成に寄与する力を認めることができる。すなわち、「木片人形（こっば人形）」がその土地や時代の風俗を主題にしてきたという歴史に注目したいのである。具体的には、「木片人形」の主題として、養蚕や鶺鴒飼い等の各地の仕事、伊那踊り等の地域独特の伝統文化、登山、スキー、スケート等の余暇活動、子守をする生活者等々、各地の製作者に熟知されている生活世界そのものを具現化した「風俗人形」として作られてきたという経緯がある。生活者としての身近な人間の姿を主題とする人形哲学は、人形に自分自身の生や身近な他者を捉え、自他へのまなざしを醸成する力を子ども達にもたらすのである。

さて、以上のような「木片人形(こっば人形)」の人間形成力を踏まえて、その児童文化財としての意義を具現化するにあたり、芸術的価値を探求する理念を温存しつつも、他方では、その遊戯性を高めるためには、人形の台座をとりはずすことが不可避的であると本研究では判断した。そこで本研究においては、「木片人形（こっば人形）」の特徴の一つであった台座をはずす形態とすることにより、子どもの人間形成に寄与する玩具であることを明確にした「こっば人形」を示すこととする。

#### 4. 子どもの人間形成に寄与する「こっば人形」の内容構成

子どもの人間形成に寄与する「こっば人形」は、人形遊びを通して子どもがそこに自他の姿を重ねたり、人間関係の疑似的關係を体験したりする

ことができるように、彼らと同年代の子どもを主題とした複数の人形により構成される。

就学前の子どもが遊ぶことを想定している人形であるが、堅固な木材という性質をめぐり、予想外の使用による破損のリスクは否めず、また、彩色が施されているという特徴は口唇で物体の存在を確かめようとする幼い子



画像3 子どもの人間形成に寄与する「こっば人形」  
制作：有馬知江美

どもには衛生面で適しているとはいえない。そこで、こうした子どもの発達過程に照らしつつ、さらに、子ども達の主体的な集団形成力の発揮が認められる時期を意識し、年長児を主な遊戯者として想定するのである。

ところで、子どもの人間形成において不可欠とされる、彼らの自由の保障においては、一方では、彼らが自由を奔放とはき違えて独我論に陥らないようにすることへの配慮も必要となる。すなわち、個々の子どもの自律性の育成もここで要請されるのである。さらに、本研究では、個々の子どもが子ども集団において自律性を発揮しつつ、同時に、他者の自律性をも尊重しようとするような人間形成を企図していることをあわせて確認しておきたいのである。

そこで、本研究においては、人形遊びの場として、家庭内にとどまらず、むしろ、同年代の他者と共に継続的に過ごすことのできる幼稚園や保育所等を適切な場と捉え、子ども達が人形を他者と共有することに主眼を置いている。また、一体の人形の共有ではなく、子ども集団の疑似的集団としての複数の人形に、自他の関係性を照らすことができるように、多様な人形を複数体一組にすることを目的とする。それ故に、複数の人形は同一規格によるものではなく、それぞれ個性を表現した人形の制作が不可欠となる。

### (1) 子どもの人間形成に寄与する「こっば人形」の3つの特徴

上記の観点から、子どもの自由を保障することを理念として持ち彼らの

人間形成に寄与する「こっば人形」は、次のような3つの特徴を内包しながら制作される。

- ①他者に迎合しない人形
- ②自由な自己表出を躊躇しない人形
- ③他者の自由と共にある人形

それぞれの人形が、上記の要素を内在させて以下のように制作されるのである。

### ①他者に迎合しない人形

子どもの人間形成に寄与する「こっば人形」制作では、子ども達が何にもとらわれずに自分の言葉やまなざしを持つ姿を表現することが求められる。換言すれば、他者に迎合しない毅然とした自由な姿を表現することが要請される。

そうした子どもの姿として、本研究では、他者に媚びることのない表情を持つ子どもの姿に自由なあり方を認め、そうした人形表現を探究することとした。

そこでまず、他者に迎合的な根拠のない笑顔を入形表情から排除することとした。概して絵画や写真等で子どもが示す笑顔は、内的な楽しさやうれしさから自ずともたらされたものではなく、大人の要請による産物であることが多い。そうした笑顔の誘導は他者に対する迎合的な姿勢を彼らのうちに育む端緒になりかねない。

これに関して、時に挑戦的なまなざしをこちらに向けたり、仏頂面であったりする子どもを描く現代の芸術家である奈良美智（昭和34年—）に依拠してみたい。彼は、「僕の子ども時代が不幸だったと自分自身で思ったことはありません。ひとり遊びが得意で、動物たちとも話が出来、空想力や想像力に富んでいたと思います。大人の眼には寂しそうに映って



画像4 他者に迎合しない人形の表情（子どもの人間形成に寄与する「こっば人形」制作：有馬知江美）

も、その被写体が寂しいと感じているかどうかは疑わしいものです<sup>18)</sup>と自らの子ども時代を回想している。彼によれば、「他者から見れば、孤独に映るような子ども時代」であっても、「自分にとっては、毎日友だちと遊ぶよりも、必然的に内なる自分と会話し、感性を育んだ子ども時代<sup>19)</sup>」だったのである。子どもの内的な豊かさは、快活さ、純真さ、かわいらしさ等の表現に直結しないことがここに示唆されている。なお、女兒として描かれているように見える彼の作品における子どもは、自画像であることも明らかにされているように、子どもの本質とは、ステレオタイプの子どもの像を超えたところにあることが知られるのである。

現実的な子どもの姿を見ると、例えば遊びに没頭する子どもが恒常的に笑顔を見せているのではないことは明らかである。子どもを笑顔と関連付けようとする傾向は、子どもに笑顔を求めようとする大人の願望の結果であり、子どもの真の姿とは乖離している可能性が高いのである。人間存在としての子どもの真なる姿を大人は捉えようとしなければならないのであるが、適切な子ども理解に基づいた表現のあり方を省察することの重要性をここであらためて確認しておきたい。

繰り返しになるが、他者により誘導された迎合的な笑顔を人形に付与するならば、人形遊びを通して子ども達は他者に迎合するあり方を身体化することになる。人形にはニュートラルな表情を表現するということが不可欠なのである。

ところで、子どもの人間形成に寄与する人形制作という観点に立つと、人形の大きさについての熟考も不可欠となる。本研究では、人形の基本的な大きさを高さ12センチとしたが、子どもの手で握ると少しもてあます大きさであるということがその根拠となっている。換言すれば、遊戯者である子どもと人形の関係性を対等な関係性とすることを意図した結果である。仮に、これより小さいサイズであると、遊戯者である子どもに人形が掌握され、人形は時に子どもの意のままに操作及び支配される対象となり、人形の自由は保障されない。これに対して、子どもがわずかにもてあ

まず人形の大きさである場合、子どもと人形の対等な関係性が築かれ、人形遊びにおいて疑似的ではあるが豊かにかつ互いを尊重した対話が引き起こされるのである。

一方で、これより大きな人形の場合は、子どもは片手で持つことを困難とする。両手で持つ木彫人形は、その素材性から抱擁の対象にはなりにくく、子どもは人形を両手で保持するにとどまることが予想される。それは、両者の心理的距離感を生起させ、その際に人形は鑑賞の対象となり、玩具性を希薄化することとなる。

なお、人形遊びはいかなる子どもにも開かれているが、人形の感触、木の香りは視覚にしょうがいを持つ子どもにとって豊かな情報となる。また、人形の体軀の個体差を認識するにあたり、片手で人形を持ち、もう一方の手で人形の様相を確かめることを通して、人間の相違を想像することもできると思われる。こうした点からも、人形の大きさをめぐる熟考が必要なのである。

さらに、起立した人形のポーズも子どもの自由の保障に関連している。人形には端的な動きを付与せず、毅然として真正面を見つめる様態が表現されている。遊戯者による人形の動きへの願望に決して応えることのない人形の自律性を示そうとしているのである。換言すれば、自分の意志で



画像5 高さ12cmを基本とする人形の大きさ（子どもの人間形成に寄与する「こっぱ人形」サンプル 原案：有馬知江美 制作：徳武忠造）



画像6 自律性を示す毅然とした姿（子どもの人間形成に寄与する「こっぱ人形」サンプル 原案：有馬知江美 制作：徳武忠造）

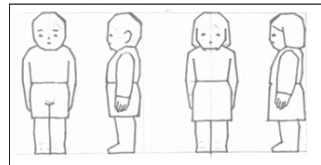


図1 子どもの人間形成に寄与する「こっぱ人形」型紙（原案：有馬知江美 作画：徳武忠造）（無断転載を禁ずる。）

毅然と前方を見つめる人形の姿のうちに、子ども達は個々の生の崇高さを感得しうるといことが考えられる。また、過度な動きを表現しない人形の静謐さは、子どもの心の安定を図るのであるが、常に安定した人形の様態が、それで遊ぶ子どもの精神の安定をもたらすのである。

加えて、耐久性や安全性という観点から、人形に可能な限り突起部分を作らず手足を身体に密着させるという配慮が含まれていることも付言しておきたい。子どもの自由の保障の根底には、第一義的に子どもの安全が不可欠であるということを改めて確認したいのである。

## ②自由な自己表出を躊躇しない人形

子ども達の人間形成において、彼らが自由な存在となるためには、他者との関係性のうちで自己表出することを躊躇しない姿勢の育成が不可欠である。彼らが自分の本質的な姿を肯定的に捉え、自信を持ってそれを表出することは、多様な状況下で他者に依存せず自己決定をなす力をも醸成するのである。そこで、自己表出を躊躇しない人形の制作が必要となる。

ところで、「木片人形（こっば人形）」は従来、多様な生活者の姿を表現してきたものであることは既述の通りである。それらは生活者の一場面を切り取ったものであるが、換言すれば、一般的な生活者の最も本質的な姿が人形として表現されているということである。本研究では、子どもを人形として表現するものであるが、こうした「木片人形（こっば人形）」の理念に照らしながら、生活者としての子どもの本質を多様な人形を通して表現したいと考えている。

そこで、人形にはそれぞれ個性を表現することとした。性差、体格の相違、国籍や民族の相違等、多様な相違に留意しつつ、一方では、そうした可視的な特徴を超えて、一体一体に内在する本質がいかなるものであるかを問いながら表現することを試みた。

人形遊びを通して子ども達は、複数の人形のうちに、自分自身や他者に近似した個体を見出したり、あるいは自分とは異なる個性に気づいたりす



ることとなる。一体一体へのまなざしは、やがて人形に潜在する内面性の相違への関心も徐々に育んでいくことになると思われるため、丁寧な人形制作に努めなければならない。

たとえば、人形の性差については、男児と女兒のみならず、性別を特定しない人形を制作することとした。また、それぞれの人形の衣装においても、ジェンダー・バイアスを問い直しながら色彩、デザイン及び柄を選定し、一方では、子どもの審美性を高めるための質の高いデザインにも留意したいと考えている。



画像7 左から女兒の人形、性を特定しない人形、男児の人形（子どもの人間形成に寄与する「こっぱ人形」制作：有馬知江美）

次に、体格については、身長、体型、身体の各部の大きさ等の身体的特徴の相違を個々に表現することとする。個々の相違を彫刻により柔軟に表現しうる木彫人形としての「こっぱ人形」の有意性をここにも認めることができるのである。

なお、これに関連して、バービー人形で知られる米国のマテル社が、2016年に「ファッションスタ」シリーズを出した際に体型の多様化を図ったことを想起したい。同社は、従来のオリジナル体型の他、トール（長身）、カービー（曲線美）、プチ（小柄）の体型をも制作販売することで美をめぐる多様性を示そうとしたのであるが、「こっぱ人形」においても、子ども達に多様な身体の美への気づきをもたらすために、身体の理想型の提示にも結び付く、同一規格による体型の固定化を回避することとした。

さらに、国籍や民族等の相違についても、幼児期からの人権教育の必要性に留意した人形制作を心掛けることとした。昨今の保育現場等での外国人児童の増加に鑑みて、複数の民族や人種をめぐり、体格や顔立ち、肌の色等の表現において多様性を表現することが不可欠である。一例をあげれば、近年、保育・教育現場においてブラジル、中国、韓国、ペルー等の家庭の児童が増加しているが、こうした子ども達の丁寧な人形表現をしてい



くことが肝要である。その際、民族や人種に付随するステレオタイプの印象に惑わされ、人形に不必要な民族衣装を着せたり、装飾品を身に付けさせたりするような安易な表現を避けることにも留意したい。

以上の他にも、多様な子どもの姿を丁寧に制作することを課題としている。

### ③他者の自由と共にある人形

「木片人形（こっば人形）」は、既述の通り、身近な生活者の姿が表現された「風俗人形」であり、昭和初期の軍靴の足音が迫る中に製作された人形を概観しても戦争をテーマにした人形は稀有であったことを特徴としている。すなわち、時代の流れに翻弄されることなく、平和という理念が一貫して「木片人形（こっば人形）」作りに流れていたと解釈することができるのであり、人形の静謐な表現が今日まで保持されているといっているのである。

平和を希求するこの人形哲学は継承させたいものであり、子どもの人形を制作する際においても、それぞれの自由を相互に保障しうる子ども集団の表現に努めなければならないのである。

ところで、他者の自由を保障するためには、他者の多様なあり方の受容が不可欠である。それは、他者に対する配慮を含んでいるのであり、5体一組の人形の中に、遊戯者による配慮を要する人形を潜在させたいのである。

たとえば、人形を起立させるにあたり、あえて足元が不安定な人形を制作し、遊戯者である子どもが人形を安定して起立させることのできる場を検討したり、あるいは人形の背後に衝立を設置したりする等の配慮を促すようにすることも一案である。

また、他の事例としては、ある人形が手に持つ花束の一輪を、他の人形に持たせることで、他者への分与の発想を遊戯者である子どもが得る契機をもたらすようにすることも考えられる。

さらに、人形を疑似的な人格と捉えるならば、遊戯者が人形を乱暴に扱うことがないように、人形を保管する場も人間の家屋と同義であるような丁寧なつくりを必要とする。

以上のような熟考を経て制作された人形は、それぞれが自由な存在として遊戯者としての子ども達に現前する。子ども達はこうした人形による遊びを通して、人形に内在する自由を身体化し、そこに自分のあり方を見出していくのである。

## (2) 5体一組とする意義

複数体の木彫人形での遊びは多種類の木材に触れることを子ども達に促すのであるが、木材によって異なる香り、色彩、質感、及び硬度等を契機として五感を通して得られる多様性への関心は、複数の自律的な人間によって構成される、人間社会における多様な生の理解を子ども達にもたらすことになる。集団保育においてクラスの疑似的な集団を構築しうる複数の人形を使用した人形遊びは、自他の生を認め、互いの生の尊重の契機を彼らに与えるという点で



画像8 子ども集団の疑似的な複数体の人形—5体であることの意義（子どもの人間形成に寄与する「こっば人形」制作：有馬知江美）

自律性の育成の根拠ともなる。こうした観点から本研究では、複数の人形を「家族」として表現するのではなく、同年代の「友だち」をテーマにして、個性差のある複数の木彫人形の制作を行うのである。

また本研究では、上記に関連して、児童文化財を通じた幼児期の人権感覚の醸成という点にも着目し、未だ学術的には稀少である人権に配慮した人形制作の意義とその課題の考察も含有している<sup>20)</sup>。

この考え方に類似したものに、「ペルソナ人形 (Persona Dolls)」がある。ペルソナ人形とは、多様性と差別の防止に取り組み、社会的多様性と公平

問題の理解を導き出すための革新的な教育ツールである。米国においてこの人形を1987年に幼児教育で使用したKay Tausは、子どもが在籍する学級を反映した人形とそれに付随した物語を創作し、人形のそれぞれに独自のアイデンティティを持たせることとした。さらに、1989年にはスパークス (Louise Derman-Sparks) が<sup>3</sup>、上記を前提にして人権教育の書である<sup>21)</sup> *Anti-Bias Curriculum, Tools for Empowering Young Children.* において、人権教育の教材としてこの人形について言及している。

肌の色調、髪質感や色等の身体的特徴の外面的な相違のみならず、語義通りに、内面的な「ペルソナ」の相違をも示す人形は、それぞれが命名され、個々の人形が抱える課題に基づきながら、個々にストーリーが作られている。たとえば、性別、性格、属する社会階級の違い、人種差別、貧困や両親の離婚を伴う家庭環境や家族文化、個々の子どもの特別なニーズ等々を反映した物語が個々の人形のために作られている。一方では、それぞれの人形の将来の夢や日常の楽しみに関するポジティブな面も語られており、こうしたストーリーを子ども達と共有しながら、教師が人形を駆使するのである。

この人形を導入した園の保育室には4～20体<sup>22)</sup>ほどがあるとされ、子ども達の前で教師がこの人形を抱擁し、人形の語りを代弁する形で、子ども達と対話するという手法をとる。子どもが自由に遊戯する玩具という位置づけというよりはむしろ、教育ツールとしての役割を人形が担っていると解釈することができる。

これに対して、本研究で探究する「こっば人形」は、子ども達に人形の使用方法が委ねられ、園生活において自由に関わることのできる玩具である。子どもの人権の尊重という点で「ペルソナ人形」との共通性も認められるが、子ども達は人形遊びを通して潜在的に人間の生を見つめるという点において、顕在的カリキュラムとして人形を使用する「ペルソナ人形」とは異なる面を持っている。

ところで、本研究では、子ども集団の疑似的集団として人形を捉えるも

のであるが、その際、5体を一組として考えている。男児2体、女児2体、性別を特定しない1体による構成である。

保育室の子ども達を俯瞰すると、クラス全体での活動、個人での活動、また、気の合う仲間集団による遊戯によって日々の生活が営まれている。個々の子どもが持つ個性によって構成される子ども集団は子どもの多様性を内在させているが、本研究では子ども達が互いの多様性を認め合い、自己存在をも肯定しうる子ども集団の基本的なサイズとして、5人という数字を割り出した。

母集団が奇数であることは、そこに属する子ども達の意見形成において意見が二分された際に、他方が過半数を超えるという状況を不可避免的に生起させる。こうした状況において、子ども達が合意形成をなそうとする際、両者間には何らかの拮抗が避けられないのであるが、それを克服するための民主的な調整能力が必要となる。あえて奇数の母集団とすることが、こうした力の育成につながるのである。

上記に関連して、ロビン・ダンバー（Robin Dunbar：1947-）のダンバー数理論を参照したい。彼によれば、一般社会における人々の交友関係を概観した場合、最も親密度が高いのが3～5人であり、そうした人々を中心に、同心円的な交友関係が見られるという。同心円はおおよそ3の倍数により広がりを見せるが、概して人々が持てる交友関係は150人前後であるとも述べられている<sup>23)</sup>。爾後、人的環境を拡大していく子ども達にとって、園内での限られた空間において、他者との関係性を持つにあたり、第一義的に5人の集団を基本とすることの根拠をここにも見出すことができるのである。さらに、昨今のIT社会におけるソフトウェア開発理論においても、5人のグループによる開発者集団が協調性、目的志向性において有効な数字であることも指摘されている。5人という単位が互いの役割を尊重しつつ、集団の力を発揮しやすい数字と解釈しうるのである。もっとも、こうしたグループは利潤を求める上での効率性を追求する数字であるという点において、葛藤や拮抗をも想定しながら発達することが望

まれる子ども集団に、直ちに援用することには注意が必要であることは付言しておきたい。

上記の観点から、子ども達の疑似的集団としての人形を5体一組とすることとし、子ども達が人形に自分の心情を代弁させて対話的構造をもたらしたり、現実的には仲間間で解決できない諸問題を人形遊びに代替させて何らかの糸口を見出す契機を得たりすることを、本研究では目指している。

## 5. 結びにかえて

本研究では、人権にも配慮した人形制作を探究するものであるが、この研究を通して得られた知見は人形のみならず、商業的製品を含んだ児童文化財全般や遊びを原理とする保育全体に通底しうる人権意識をめぐる啓蒙的意義を含んでいる。子ども観の具現化としての児童文化財への省察の契機ともなることから、本研究は現代の子ども観の問い直しをも問題提起している。

また、今日、商業主義の横行により、子ども達に迎合的な玩具も見受けられる中で、将来的に保育者等による制作をも想定した「こっば人形」の非代替的価値は、子ども達の遊びを通して彼らに潜在化し、自己存在や他者存在の非代替性に対する彼らの認識の契機ともなるという点で道徳教育にも還元しうるのである。

加えて、子どものための玩具として「こっば人形」を教育的価値を持つものとして位置付ける新たな試みは、文化の担い手としての子ども達に、文化の継承の必要性を喚起し、伝統工芸の維持の発想にも発展していく。奇しくも平成31年に100周年を迎えた農民美術の歴史的伝統性をも踏まえながら、一方では「木育」等の展開をも担う新規性があるという両義性も内在しているのである。

ところで、現代社会をみると、貨幣価値と結びつきやすい知への偏向を基盤としたディレッタンティズムの横行、専門分化され高度化された知を前に各々の人間が知を有機的に捉えられない状況、さらにはそうした状況

のうちで既成価値に翻弄され追従を免れない主体の姿が散見され、私たちの世界に対する自由な関わり方の不在を認めることができる。すでに19世紀末に近代合理主義批判、教養主義批判という観点から教養論を展開したニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzsche：1844－1900）は、こうした状況を時代の中に鋭く捉えていた。

彼は、当時の大衆化された知をめぐり、「他者によって語られた言葉」に翻弄されるディレッタンティズムに陥ることなく、各人が自分を取りまく世界に自由な関係性を持ちながら、とらわれのない「自らの言葉で語る」必要性を示したのである。その際、彼は、ロゴス中心主義に陥らずに、対象世界にじっくりと対峙し、そこから他者の生を「聴く」ことを通して自らの言葉とまなざしを獲得する真の教養者のあり方を示した。換言すれば、自分の直観を通して世界を認識し、「自らの言葉で語る」ことに意義を見出したのである。

「自分の言葉で語り、かつ、自分のまなざしで世界を見つめる」ことを可能にするためには、やがて文化の担い手となる子ども達に着目することを避けられない。子ども達のうちに、対象世界に自分の言葉とまなざしで関係しうる力を育成することはきわめて重要な課題の一つである。ニーチェは、人間の精神の最高段階としての子どもの自由を見出し、そこに文化創造の原動力を認めているが、彼らの言葉とまなざしを醸成するために、彼らの生活に充溢する遊戯を保障することの重要性を考察し続けなければならないのである。

本稿ではこうした観点を根底に持ちながら、子どもの遊戯を保障する玩具としての人形制作に焦点をあてたのであるが、世界に対する自由な関わり方を彼らに促すことのできる人形制作は、まだ緒に就いたばかりである。今後、人形を改良しながら人間形成に寄与する「こっぱ人形」のあり方をさらに探究するものとする。

謝辞：長野県農民美術連合会会長徳武忠造氏には、子どもの人間形成に寄与する「こっば人形」の筆者（有馬知江美）による原案を元に、型紙制作、サンプル制作をして頂いた。また、筆者の「こっば人形」制作のご指導も賜り、さらに、農民美術運動における「木片人形（こっば人形）」に関して多くをご教示頂いた。上田市立美術館学芸員小笠原正氏には資料の閲覧の機会と提供を頂いた。ここに記して深謝したい。

## 註

- 1) 有馬知江美「子どもの『自由』を保障する児童文化財の制作について —児童文化財と子どもの権利の交差性—」『白鷗大学教育学部論集』12(1)平成30年 17-33頁。
- 2) 有馬知江美「子どもの感性を通した『人権保育』の視座」『白鷗大学教育学部論集』7(1)平成25年 39-55頁。
- 3) ボルノーは『実存主義克服の問題 新しい被護性』（O.F. ボルノー 須田秀幸訳 未来社 昭和44年。）においてこの概念を論じている。
- 4) 林野庁「科学的データによる木材・木造建築物のQ&A 木材・木造建築物はどのような効果をもたらしますか？」（木構造振興株式会社 平成29年。）を参照した。
- 5) Satoshi Sakuragawa, Tomoyuki Kaneko, Yoshifumi Miyazaki *Effects of contact with wood on blood pressure and subjective evaluation.* J Wood Sci (2008) 54 : The Japan Wood Research Society 2007 p.107-113.
- 6) 島地謙「2. 木材の組織構造」木材の特性 『材料』28巻（1979）310号 日本材料学会 昭和54年 671頁。
- 7) 同論文 671頁。
- 8) 同論文 671-677頁。
- 9) 大正期に作られたものと推測される。
- 10) 有馬知江美「農民美術『木片人形』製作における精神的価値について —その歴史的遡及と今後の普及に向けて—」『人形玩具研究 かたち・あそび』日本人形玩具学会 第28号 平成30年 159頁。
- 11) 山本鼎「いろいろな木彫人形」『農民美術 副業の機関雑誌』創刊木彫號 日本農民美術研究所出版部発行 大正13年 39-40頁。
- 12) 山本鼎『美術家の欠伸』アルス 大正10年 153頁。「白樺巻（彩画）」、「小物入（彩画）」、「木盆（彩画）」、「木箱（くりぬき）」、「ペーパーナイフ」等である。
- 13) 同書 154頁。女子練習生は刺繍部に属し、「クッション（刺繍）」、「手提袋（刺繍）」、「半襟（刺繍）」、「卓子掛（刺繍）」、「棚敷（刺繍）」を製作した。
- 14) 赤井正二『旅行のモダニズム 大正昭和前期の社会文化変動』ナカニシヤ出版 平成28年 54頁以下。
- 15) 近年長野県上田市において開催されているこっば人形初心者講習会では、彫刻のしやすい柔らかい科の木の角材を使用することが多い。
- 16) 山本前掲論文 39頁。

- 17) 同論文 39頁。
- 18) 奈良美智ブログ「奈良美智の日々」 <https://ynfoil.exblog.jp/d2011-03-11/>
- 19) 同ブログ。
- 20) 有馬前掲論文「子どもの『自由』を保障する児童文化財の制作について ―児童文化財と子どもの権利の交差性―」を参照されたい。
- 21) Louise Derman-Sparks and the A.B.C. Task Force : *Anti-Bias Curriculum, Tools for Empowering Young Children*. National Association for the Education of Young Children, Washington, D.C. 1989 p.16-19.
- 22) Trisha Whitney : *Kids Like Us, Using Persona Dolls in the Classroom*. Red leaf Press. 1999. P.2.
- 23) ロビン・ダンバー 藤井留美訳『友達の数は何人？ ダンバー数とつながりの進化心理学』インターシフト 平成23年 28－30頁。